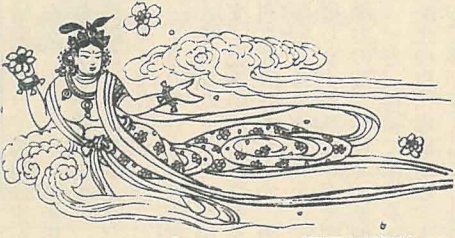


# 書と絵と歌

太古から人間は絵を描いてきたとい  
います。アルタミラやラスコーなどの  
旧石器時代の洞窟美術は有名ですし、



「飛天伎楽資料」より

日本では、九州北部に多い五〇六世紀頃の装飾古墳も思い浮かびます。いずれも呪術的な意味合いが濃いとされていますが、芸術としての絵画にも古い歴史があります。

現在も正倉院に屏風や絵の描かれた調度品などが残っていますし、次のような万葉歌からも絵画の歴史を垣間見ることができま

す。  
海原の 遠き波を 遊士の  
遊ぶを見むと なづさひそ来し

(巻六―一〇一六)

この歌は、巨勢宿奈麻呂の家に官人たちが集まって宴したときの歌で、その際に「蓬萊の仙媛の化れる囊褳は、風流秀才の士の為なり。こは凡客の望み見らえぬかも」ということばと囊褳の絵が白い紙に書いて部屋に掛けてあった、ということばです。つまり、宴席に絵と文を書いた掛け軸がかかっている、それを見て歌を詠んだということのようです。

蓬萊とありますから、これは中国文化の影響下にあるということが明らかです。蓬萊とは蓬萊山のこと、方丈瀛州とともに、仙人が住む伝説上の地です。しかしここでは、そこに住む仙女が化けたという植物の絵だけが描い

てあり、風流秀才の士でなければ仙女の姿は見えないというのです。

みやびをとというのは、教養があつて風流を解す都会的な男性のことで、宮び(宮廷風)とは鄙び(田舎風)に対することばです。この宴の趣向を楽しむ人びとを指しています。そこでさらに、仙女になり代わり、海原の遠い路をこのような風流人たちが集い遊ぶのを見ようと思つて苦心してやつてきた、という歌が詠まれたのです。

平安時代になると、屏風に描いてある絵をみて歌を詠むのが流行しますが、同じようなことを既に奈良時代にも楽しんでいたので驚かされません。その上、美しい仙女そのものではなく、化身とされる植物だけが描いてあつたというのもしやれています。宴の出席者それぞれが思う美女が立ち現れたことだろうと思います。

この歌は、書と絵と歌が結びついた好例ということができるといふでしょう。  
(万葉古代学研究所主任研究員・井上さやか)